日本イギリス哲学会関東部会第79回研究例会（2007年6月23日、聖心女子大学）
報告要旨

報告1
「個体同定に関するヒュームの理論」
萬屋 博喜（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）

ヒュームは『人間本性論』第一巻第四部第二節において、個体同定の理論を外界存在の知覚論の内部で論じる。その議論は、一見すると「いかなる心理的過程を経て個体を同定するのか」を因果的に説明する記述的心理学の一環として読める。しかし、ヒュームは『人間本性論』第一巻第四部第四節と第七節で、特定の規範に照らして正当と判定される個体同定の識別方法や諸基準についても論じている。そこで本報告は、記述的心理学としてではなく一種の規範的認識論として彼の議論を理解する可能性を示したい。そのためにまず、『人間本性論』の議論一般の方法と目的を確認したのち、『人間本性論』における個体同定の問題を定式化する。次に、その問題に対してヒュームは、懐疑論との関係のもとで、社会的実践性、指標詞、傾向性という諸要素を用いて応答していることを示す。最後に、当該の理論に対して向けられるだろう反論を簡単に検討したい。

報告2
「『リヴァイアサン』のマルチチュード」
的射場瑞樹（早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程）

トマス・ホッブズの『リヴァイアサン』が『法の原理』および『市民論』と特徴的に異なるのは、前二著作で強調されていた人民 people と群衆 multitude の区別に関する記述の消失、および「授権理論」の導入であり、これらは相互に関連している。前二著作における「人民□群衆理論」は、全体として権利をもつ統一体としての人民を想定しているが、「授権理論」では、個別に権利をもつ諸個人が個別に主権者に権限を委任するという理論構成を取る。すなわち、「授権理論」では「人民」が消失したことになる。「授権理論」導入の歴史的文脈に関しては、代表理論をめぐって、パーカーら議会派の主張に応答したものという分析と、レヴェラーズに応答したものという分析があるが、上で示した理論展開を踏まえると、後者の分析により整合性が見られる。そしてそれは、『リヴァイアサン』のホッブズが自身の政治論の対象、すなわち内乱の当事者に対する認識に大きな変化を生じさせていたことを意味している。